

## 平成 25 年度 NGO 活動状況調査レポート

---

平成 25 年度は、平成 26 年 2 月 16 日（日）から 22 日（土）までの 7 日間、賛助会員等 7 名をカンボジア王国に派遣し、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けている「特定非営利法人アジア・レインボー」、「特定非営利法人 JHP・学校をつくる会」、「特定非営利法人難民を助ける会」の 3 団体の活動状況調査を実施した。

「特定非営利法人アジア・レインボー」は、平成 15 年度から平成 24 年度までに 8 回、国際ボランティア貯金の寄附金を受けて、ベトナムの障害のある児童の教育支援活動とカンボジアの貧困者の教育支援活動を実施しているが、そのうち、5 回が今回調査したカンボジアの職業訓練センターの運営等の支援事業となっている。

平成 21 年度の国際ボランティア貯金寄附金配分を受けて、カンボジアのプノンペン市ステンミンチャイ区にレインボー職業訓練校（Rainbow Vocational Center 略：RVC）を建設（22 年度完成）し、運営等を支援している。

この地区はプノンペン市最大の工場地帯で、約 70 の工場があり 10 万人以上が働いている反面、最貧困地域ともなっている。

レインボー職業訓練校



電化製品修理クラス



縫製・美容クラス



今回、RVC を訪問して各クラスの授業を見学して説明をいただいた。

その際、縫製と美容クラスで年 2 回実施しているファッションショーが前日あり、出演した 9 名の生徒が自ら制作した衣装によるファッションショー風の演出があった。

縫製のことは詳しくないが、それぞれに似合った衣装で良く出来ていた。

RVC は、電化製品修理クラス、エアコン修理クラス、バイク修理コース、縫製クラス、美容コースの 5 コースでそれぞれ午前、午後、夜間のクラスがあり、平成 23 年度は 234 名が在籍していた。

馬場代表によると生徒数は 5 年で 883 名となっているが、平成 26 年 1 月 3 日に縫製工場の労働者による暴動の影響を受け、現在の生徒数は半減している。

国際ボランティア貯金の寄附金で購入したエアコン、冷蔵庫、バイク、ミシン、発電機の消音コンクリートボックスなども活用されているが、授業料が6か月\$60と民間の\$200～\$800に比べかなり安価な設定となっているため、今後の学校運営にはまだ支援が必要だと感じた。

RVC卒業生の出店している美容室3軒とバイク修理店1軒を訪問して、日中店を営んでいる卒業生や平日縫製工場で働いて土日に美容室を営業している卒業生から、大半が兄弟・姉妹と一緒に住んでいる話や経営状況などを伺い、商売・生活の大変さを感じた。

卒業生の美容室



卒業生のバイク修理店



卒業生の美容室



「特定非営利法人 JHP・学校をつくる会」は、平成9年から平成24年まで12回、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けている。

さまざまな事業を行っているが、小学校建設、学校環境改善のためのトイレ・給水施設建設及び衛生教育支援事業で配分を受けている。

衛生施設は公衆衛生だけでなく、男女間格差は正や教育等への影響も大きく、学校建設事業と併せてトイレ・井戸建設に取り組んでいる。

実施地のカンボジア王国プレイベン州は、学校数772校のうち、189校にトイレがなく、カンダール州では674校のうち208校にトイレがない状況となっており、トイレ等の施設は衛生的な学習環境整備だけでなく、女子生徒が学びやすい、女性教師が赴任しやすい環境づくりにも大きく寄与している。

平成24年度の対象校8校へのトイレ14棟70室・給水施設8基の建設を行った。

当会の調査は、プノンペンから東へ約160km離れたプーンチャ小学校が最初の訪問地で、この小学校の校舎は2013年にサークルKサンクスの資金援助により、JHP・学校をつくる会が建てたものである。校舎の隣に併設されているトイレが平成24年度国際ボランティア貯金の寄附金で建てられたトイレである。内部は綺麗に保たれており、衛生面も指導されたようだ。生徒数は260名で7クラスとなっている。

次の訪問地は、農作物を運ぶ大型車が通るためデコボコ道となっている道路を4WDに揺られること1時間、バンプレア中学校へ到着した。

この中学校の生徒数は650名で17クラスとなっている。

ここもプーンチャ小学校と同様に平成24年度国際ボランティア貯金の寄附金で建てられたトイレの他、給水施設が設けてあった。生徒数に比較してトイレは少ないように思えた。

次の訪問地は車で30分のところにある、今回訪問した中で一番大きなピームロー中学校で、生徒数は2,000名で41クラスとなっている。

ここも2013年6月にサンクスがJHP・学校をつくる会へ寄託して建てられた校舎があり、雨季になると道路に面していないところでは、雨水がたまり現地ガイドの話では湖と言っていたが、舟で通学する人もいるそうだ。

その関係から校舎は高床式となっていて、通常の校舎の建築費用が600万円程度対して、1,000万円程度掛かり割高となっている。



「特定非営利法人難民を助ける会」AAR Japan (Association for Aid and Relief, Japan) は、国際ボランティア貯金の寄附金配分が始まった平成3年から平成24年まで45回、12か国、うち、カンボジア王国は8回、寄附金配分を受けている。

カンボジア王国における事業は、1992年以降、カンボジアで車いすの製造・配付や障がい者のための職業訓練などさまざまな活動を行っている。

2013年4月より、首都プノンペン近郊のカンダール州にある3つの地域で、障がいのある子どもも、障がいのない子どもと一緒に学ぶ「統合教育」の推進を通じた障がい児の支援を始めている。

まず、物理的な障害を取り除くため、スロープの設置、トイレの改修、校舎敷地内の舗装を行った。

また、教員に対しては、障がいに関する基本的な知識や統合教育の考え方、障がい児への配慮および教授方法などについての研修を実施。同地域では障がい児の数や就学状況や抱えている問題などについて調査し、車いすや歩行器といった補助具の提供や、受けられるサービスの紹介などを行っている。更に障がい児の家庭や地域住民が、障がいに関する知識や教育の重要性についての理解を深められるよう、地域での啓発活動も実施している。

当会で最初に訪問したコッチュラム小学校は、プノンペンから日本の無償援助により作られた「日本橋」（愛称）を渡り、国道6号線を北へ1時間で到着。生徒数は879名、教員は28名となっている。

校舎は道路に面してコノ字型に建てられていて、校舎と校舎を繋ぐ通路（コンクリートとタイル）とトイレは国際ボランティア貯金の寄附金配分で作られている。障がい者にも配慮されていて校舎に繋がる通路はスロープになっており、トイレも障がい者用トイレも作られていた。

ただし、これから行く2校も同様なのだが、障がい者用トイレの引き戸に隙間があり角度によっては、中が見えてしまうので、AARの代表代行はすぐに修理すると言っていた。

次に訪問したスパイ・ロミアット小学校は生徒数481名、教員20名となっている。この学校でも同様に国際ボランティア貯金の寄附金配分で作られた校舎と校舎を繋ぐ通路（コンクリートとタイル）とトイレを見学した。

障がい児は、目が若干不自由な生徒と車いすの生徒がいて、目の治療及び車いすの提供などを行った。

最後の訪問はプラエク・タミア小学校で、生徒数1,685名、教員55名となっている。この学校も同様に国際ボランティア貯金の寄附金配分で作られた校舎と校舎を繋ぐ通路（コンクリートとタイル）とトイレを見学した。

校舎が2〜3段高くなっているため、障がい児に負担にならないようスロープに緩やかな傾斜をつけるなどの工夫がされていた。

義足や車いすの生徒がいたが、いずれもAARからの提供によるものである。

こういった義足にしる、車いすにしる、支援がないと個人ではとても購入は難しいと思われるため支援の必要性を痛感した。

コッチュラム小学校  
教員との集合写真



スパイ・ロミアット小学校  
障害者用トイレ



プラエク・タミア小学校  
教育キット遊びながら学ぶ



「特定非営利活動法人幼い難民を考える会」のプノンペンの民芸品ショップ

NGO団体の「幼い難民を考える会」の活動の一つで、現地住民（主に女性）に技術指導して作った製品を販売するフェアトレード店を見学して、ショップの日本人駐在員より活動内容を伺った。

首都プノンペンから車で1時間半のところ、タケオ州のトロピエンクラサン村に当会の織物技術センターがあり、活用されていなかった村のコミュニティセンターを借り受けて、2003年から織物技術研修を行っている。

ここには、研修を修了した織り手たちが、ほとんど毎月のようにやってきては、自分たちの製品づくりを行っている。

シェムリアップにも「若い難民を考える会」で製作された作品を置いている土産物店があるため見学した。ただし、製品を卸しているだけなので話は伺えなかった。

観光地なのか同じ商品でもシェムリアップの土産物店の方が、値段が倍程度高かった。

若い難民を考える会のプノンペンの  
ショップ 向かって右が関口さん



若い難民を考える会のシェムリアップ  
の土産物店



若い難民を考える会のシェムリアップ  
の土産物店で販売している作品



今回の調査に参加した方々は、全員がカンボジアを訪れるのは初めてで、また、厚井専務理事以外は NGO の活動の現場を見るのも初めてであったこともあり、「大変刺激になった」、「日本には経験できないことに会うことができました」、「地道に活動をされている NGO の方々にあらためて、尊敬の念を頂きました」、「出会った人々が皆、明るく、前向きで、生き活きとした生活を送っている人々と触れ合ううちに、幸せというのは必ずしも近代化に左右されないものであると感じた」等の感想が寄せられた。

また、団長として同行した当財団の厚井専務理事は、「今回はたまたま学校関係のプロジェクトばかりでしたが、いずれも日本の NGO の方々が熱心に取り組んでおられました。また国際ボランティア貯金の寄附金も大いに役立っていることを確認できましたし、現地の方々や NGO の方々からも感謝の意が表されていました。この寄附金がもうすぐ底をついてしまうのが残念です。」とのコメントがあった。